狂犬病ワクチンの説明書
商品名：ラビピュール筋注用

■狂犬病について

日本では1957年以降、国内感染はありません。2006年にフィリピンで犬に噛まれ、帰国後に発症した2例が報告されています。発熱、咬傷部位の痛みや痒み、続いて幻覚、精神錯乱が出現します。呼吸障害によりほぼ100％死亡します。世界的には狂犬病根絶国は珍しく毎年7万人が感染しています。潜伏期間は1ヶ月～数年です。

■感染経路

・感染動物に噛まれたり、掻かれたりすることで感染します。
・保有動物はイヌ、ネコ、リス、コウモリなどのほ乳類です。

■流行地域

・日本、英国、オーストラリア、ニュージーランド、ノルウェー、スウェーデン、一部の島国を除いて全世界で発生しています。

■診断と治療

・動物咬傷歴から疑い、唾液や脳脊髄液からウイルスの遺伝子検出で診断します。
・発症すれば有効な治療法はなく、ほぼ100%死亡します。

■予防方法

・動物への安易な接触を避ける。
・動物に噛まれたらすぐに患部を洗い、ワクチン接種を開始する。
・噛まれる前にワクチンを接種する。

■ワクチン接種対象者

厚生労働省や米国疾病対策予防センターが接種を推奨する国や地域に赴く方。

■ワクチンについて

・国内承認ワクチン「ラビピュール筋注用」と輸入国内未承認ワクチン「Verorab」を取り扱っています。
・渡航までに暴露前（噛まれる前）ワクチンを3回接種します。
・暴露後はワクチンを接種していれば2回の追加接種、接種がなければ5回接種です。
・「ラビピュール筋注用」採用に伴い、国内未承認ワクチン「Rabipur」の取り扱いを終了しています。
・国内未承認ワクチン「ChiroRab(Rabipurと同等品）」は採用していません。

	ラビピュール筋注用(国内ワクチン)
【製造会社】	GSK（GlaxoSmithkline） → 株式会社オーファンパシフィック
【適応年齢】	6ヶ月以上。
【接種回数】	暴露前は3回。暴露後は2回。
【ｽｹｼﾞｭｰﾙ】	初回と1週間後と（3週間後or）4週間後。暴露後は当日と3日後。
【接種方法】	筋肉注射。
【持続期間】	3年間。

■副反応

注射部位の違和感、発赤、疼痛を生じることがあります。まれに発熱、頭痛、倦怠感、筋肉痛を認めます。ごくまれにアナフィラキシーショックを起こします。

■諸注意

過去に同ワクチンにアレルギーを起こされた方、発熱している方は接種できません。
妊娠・授乳中の方には推奨しません。

■健康被害が生じた場合

PMDAによる公的救済制度の適応です。
発生した副反応などの症状には保険診療で対応します。

海外で動物に噛まれた場合の対応方法

暴露の分類

カテゴリー 1

動物に触れる。餌をやる。傷のない皮膚をなめられる。
＞＞暴露ではない。ワクチンは不要。

カテゴリー 2

動物による出血を伴わないひっかき傷。
＞＞軽度の暴露。ただちにワクチン接種。

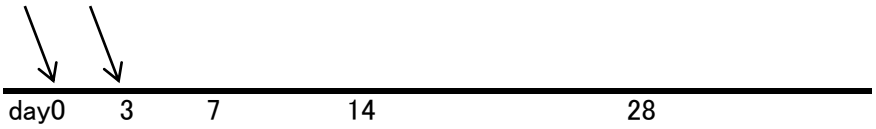
カテゴリー 3

皮膚を貫通する咬み傷やひっかき傷。
傷のある皮膚や粘膜面（口や舌）を舐められる。
＞＞重度の暴露。ただちにワクチン接種と免疫グロブリン投与。

ワクチン追加接種スケジュール

＜事前にワクチンを接種している場合＞

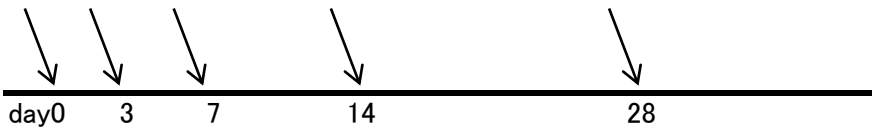
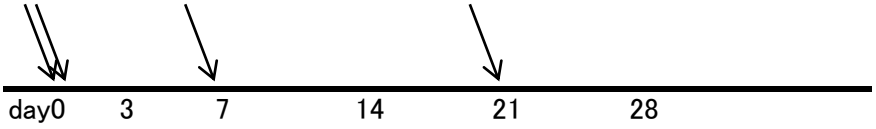
噛まれた日(day0)と3日後にワクチンを追加接種します。
ただし、免疫グロブリンは不要です。



＜ワクチンを接種していない場合＞

噛まれた日(day0)の他に以下の日程でワクチンを追加接種します。
カテゴリー3なら速やかに免疫グロブリンも打つ必要があります。

＜Essen法＞



＜Zagreb法＞